Graham Greene 研究

The Pinkies（1）

宮　野　祥　子

I

Graham Greene を，いわゆるカトリック作家と呼ぶようになった作品であると言われている *Brighton Rock* (1938) は，すでに数多くの批評がなされていて，その善と悪，及び正と不正という主題については，それらの具体的な体現者である Pinkie と Rose, 及び Ida を通じて，語り尽くされているといっても過言ではない。その明確な人物造型の故にアレゴリーとして読むことも可能である。例えば，A. A. De Vitis は，〈…it must be read as allegory. The grotesque images of evil are as terrifying as the medieval representations of angels and demons〉[1] と述べ，その背景となる事物がエリオットの *The Waste Land* に負うところがある，と説明している。また，B. P. Lamba は，Pinkie の育った環境は Dante の *Inferno* の住人にふさわしい[2] と解説している。

悪〈evil〉の実現者である Pinkie については，〈a priest of Satan〉[3] であるとか，Milton の〈Satan〉に似ている[4] とか，〈a spoilt priest〉[5] と言われたりしている。それは，彼の幼い頃のカトリックの教育の故であり，彼の人生についての知識は限定され，育った環境の地獄のような状況と悪の実態にしかリアリティを見ることがなかったからである，としているが，それは，スラム街の彼の家庭が，彼のリアリティであり，苦悩，孤独，不安を耐えることが彼の17年間の生活であったからなのだ，というわけである。

カソリシズムがこのような意味で，Pinkie の悪への傾向，及び知識を，

ひとつの意味のある行動及び存在として理解することを可能にしている，と言うことはできる。つまり，本来ならば，社会の中から否定され抹殺されるべき悪行が，逆説的に，対立的に，善なるものを明らかにするという意味で，その存在価値を獲得する，と理解することである。これは，Greene の言う〈examine more closely the effect of faith on action〉[6] を実証するものだ，とする意見の，ひとつの解釈なのである[7]。

Pinkie の悪の根拠を，スラム街というモラル不在の環境に求める説もまた数多い。B. P. Lamba は〈It is this childhood of moral chaos, lies, brutality and complete inhumanity that makes Pinkie evil〉[8] と述べている。また，Kurismmootil, S. J. も同じ説明をしているが，彼は，善そのものの体現者である Rose もまた，Pinkie と同じスラムという土壌が育てた花である[9]と尤もな指摘をしている。

Greene 自身は，或る対話のなかで，〈One gets so tired of people saying that my novels are about the opposition of Good and Evil. They are not about Good and Evil, but about human beings. . . . I would hope it was common to most of us to have sympathy for the unfortunate part of the ordinary human character〉[10] と，登場人物に，より作品の焦点が合わされるべきであることを語っている。また，別の対談では，〈I don't think I have been frightened by any of my characters, having created them myself I feel safe—but I suppose otherwise I would say perhaps Pinkie in *Brighton Rock* was the most frightening〉[11] と Pinkie に対して今なお，その性格設定については，作者自ら或る種の底の深さを認めているようである。

Greene は，また，*A Gun for Sale* の Raven について，Pinkie の素描であると説明しながら，つぎのような興味深い発言をしている。

. . . Raven the killer, seems to me now a first sketch for Pinkie in *Brighton Rock*. He is a Pinkie who has aged but not grown up. The Pinkies are the real Peter Pans——doomed to be juvenile for a lifetime. They have

something of a fallen angel about them, a morality which once belonged to another place. The outlaw of justice always keeps in his heart the sense of justice outraged—*his* crimes have an excuse and yet he is pursued by the Others. The Others have committed worse crimes and flourish. The world is full of Others who wear the masks of Success, of a Happy Family. Whatever crime he may be driven to commit, the child who doesn't grow up remains the great champion of justice. ... As children we have all suffered punishments for faults we have not committed, but the wound has soon healed. With Raven and Pinkie the wound never heals.[12)]

悪を行う人物に，堕天使〈a fallen angel〉を比喩として用いることは，その悪魔を意味することから推し量ることが可能であるが，Peter Pan をともにその比喩として用いることは，悪の人物造型に，あるいは，Geeene の悪の理解に特色があるのではないか，と考えられるのである。さらに，悪を，Peter と悪魔で比喩する描写が，*The Third Man* の Harry Lime についてもなされていることからも，そのように考えられるのである。

He's never grown up. Marlowe's devils wore squibs attached to their tails: evil was like Peter Pan—it carried with it the horrifying and horrible gift of eternal youth[13)].

こうしてみると，Peter Pan と悪魔をキー・ワードとして，Greene の言う〈the Pinkies〉は，Raven, Pinkie, Harry で，その一族を成していると見なしても良い存在なのではないかと思われるのである。

そこで，本稿では，まず，比喩としての〈Peter Pan〉，〈a fallen angel〉，つまり，子供で在り続けることに伴う特色と，堕天使が現している悪魔性の特色を理解することを試みてみたいと思う。そのことは，〈the Pinkies〉という一族の特質を考察するための，ひとつの手掛かりとなるように思われるからである。

Ⅱ

文学のなかに描かれた子供のイメージについて，Peter Coveney は子供に対する〈二つの対照的態度，生命志向と逃避・死志向〉[14]を結論として掲げている。人間は経験を経て統一的全体像へと成熟するという観点において，ロマン派の芸術家が子供に見い出すのは，〈真の成熟に向かって鋭く伸びるシンボル〉，〈いわば，創造的シンボルであり，発達してゆく意識と外界の経験とが触れ合う接点であった。その接点を中心に，彼らは自分の不安と，そしてこれが重要な点だが，人間救済の希望とを凝集する〉[15]ことになったのだが，このようなイメージがそれ以後の作家たちの基調となったのである。そして，そのような重要な影響を及ぼしながら，そのロマン派のイメージは成立するとともに，〈成長と生命と豊饒のシンボル〉が〈「無知」と「死」礼讃の象徴〉[16]という逆転する価値を，もつにいたったことを指摘している。

Peter Coveney は，さらに，子供が，人間の成熟・統一的完全像へ向かう可能性を秘めているという見解が，変化を見せ始めたのは19世紀中葉からであると，述べ，〈無垢のもつ「生」の積極的肯定の主張は逆転して，退行と死を指すものになり下がり〉[17]，〈おとなの世界に確たる方向を見出すことがますます難かしくなった時代には，（中略）文字通り幻想と幼年期への郷愁の世界にあと戻りしたいという誘惑が，ある種の作家たちには働いていたように思われる。十九世紀の末には，芸術のひとつの流れの上にはっきりと，ピーター・パンの映像が影を落としていた〉[18]と判断している。それは，芸術家たちが，彼らの生きている現実に適応できなくなったことを表わし，そして，そのような傾向を示す芸術家の〈幼年期に対する未練がましい憧れは，「故郷」を思う亡命者（エグザイル）の郷愁と同じ屈折した情念を帯びるものである。世紀末のある種の芸術家たちは，まさに異郷にある亡命者そのもの〉[19]であるという興味深い示唆へと展開している。

この亡命者の意識，疎外された者の意識は，Peter Pan のような特殊な

存在を，きわめて適切に表現していると考えられるが，Peter Coveney は，J. M. Barrie については，〈イギリス的幼時懐古の典型である。『ピーター・パン』と『泣き虫トミー』は，バリー個人の郷愁に満ちた苦境の表現であ〉[20]り，〈バリーの書いた物語は，おとなになりたがらない少年の物語どころではなく，そうした拒否反応をとことんまで追いつめて，生まれてくる必要などなかったのにと，痛ましく訴える少年の物語なのである〉[21]とまことに手厳しく，その逃避精神を母性に対するコンプレックスに根拠を置いている[22]。

Greene が悪を行う登場人物に，Peter Pan を比喩として用いて，表現しようとしていることは，まず永久に年をとらない，つまり，若さであるのは，〈doomed to be juvenile for a lifetime〉〈the horrifying and horrible gift of eternal youth〉からも明白である。しかし，凶運にさだめられている〈doomed〉，身の毛もよだつ，おぞましい〈horrifying, horrible〉が示唆しているように，ここで言うところの〈若さ〉は，Peter Coveney の指摘するように，否定的な要素を内包している若さのことを意味しているのである。従って，子供であることを選び続ける Peter Pan に付与されている多様な要素を分析することによって，Greene の造型する悪を行う人物の特色を探ることができる，と考えられるのである。

海賊 Hook に〈I'm youth, I'm joy〉〈I'm a little bird that has broken out of the egg〉[23]と呼ぶ Peter Pan は，実は〈I don't want ever to be a man〉〈I want always to be a little boy and to have fun〉(p. 43) と，母親のいる家から Kensington Gardens に逃げ出した子供である。このことは，彼が家族という単位で成立する市民社会，つまり，出生，成長，死という通常の人間の在り様からの，移り変わって行く人間社会からの逃亡者，はずれ者として設定されていることを明らかにしている。

彼は〈... wailed piteously in them. They had to do, ... with the riddle of his existence〉(p. 158) と夢のなかで痛ましく泣くような見捨てられた子の痛みを抱いている。しかし同時に，〈There never was a simpler, happier

family until the coming of Peter Pan〉(p. 18) と述べられているように，Peter の出現は，父親と母親と子供がいる，というきわめて平凡な普通の幸せな生活を破壊したのである。彼には，家庭の幸せは，〈the one joy from which he must be for ever barred〉(p. 202) であり，母親の，子供を思う当然の愛情を嘲笑する〈... he cried, with a frightful sneer at the laws of nature; 'we don't want any silly mothers.'〉(p. 200) 子供として描かれている。彼は〈自然の法則〉を，つまり人間としての自然の姿を無視するのみならず，嘲笑によって自然な人間の在り様からの離反，逸脱を現しているのである。

このような，はずれ者の特色は，もちろん，Peter が遊びまわっている間，彼の母親は窓を開けて待ち続けることはせず，〈... but the window was barred, for mother had forgotten all about me, and there was another little boy sleeping in my bed〉(p. 140) 彼を閉め出してしまった母親に対する反感と，家庭から閉め出され，見捨てられた子供であるということに由来している。

今，Peter は迷い子の隊長として，Neverland に住む彼らのために，Wendy を母親として連れては来るものの，彼女が母親の役割を演じて，迷い子たちに，母親の愛情の強さを語るとき，Peter には，それは嫌な話であり，彼は〈a hollow groan〉(p. 139) をあげるのである。彼は母親の〈bad points〉(p. 144) だけを記憶している子供なのである。

彼を閉め出したおとなの世界に対する，Peter の恨みは深く，Wendy たちが家庭を思い出して，迷い子たちと共に家に帰ることになった時の，Peter についての描写は，子供のもっている残酷性をきわめて的確に伝えている。

... he was so full of wrath against grown-ups, who, as usual, were spoiling everything, that as soon as he got inside his tree he breathed intentionally quick short breaths at the rate of about five to a second. He did this because there is a saying in the Neverland that every time you breathe, a grown-up dies, and Peter was killing them off vindictively as

fast as possible. (p. 141)

呼吸をするたびに，つまり，彼が生きて呼吸をするたびに，おとなが死んでいく，しかも，出来るだけ速く呼吸して，執念深くおとなを殺している Peter には，道徳や倫理を超えたところに在る，悪以前の暴力，つまり，罪の意識に染っていない，無知でもあり，無垢でもあり得る，野蛮性が示されていると考えられるのである。それは生と死の本当の意味を，その絶対性を理解していない，つまり，人間が死によって存在を失うということを理解していないことを示しているのである。

永久に子供である Peter には，〈To die will be an awfully big adventure〉(p. 121)，死は新しいひとつの冒険，すなわち，経験であり，死は時間的な限界，或は，人間存在の限界を意味するものではない。このような死についての無理解は，彼が逸脱した非人間的な領域に在ることを説明しているし，また，彼が情容赦がない〈heartless〉子供であることを明らかにしているのである。

〈a map of a child's mind〉(p. 18) である Neverland に飛んで行ける子供，飛ぶことの出来る者には〈only the gay and innocent and heartless〉(p. 212) という三つの条件が求められている。〈heartless〉であることは，その一つの条件であって，Peter が残酷である点については，迷い子が成長をするという規則違反〈to be growing up, which is against the rules〉(p. 69) に対する処置の仕方にもあらわれている。Peter は成長した子供たちを間引く〈thins them out〉(p. 69) という，望ましくない不良の苗を間引くような，無邪気にも罪の意識なく，情容赦のない冷酷な子供である。

さらに Peter Pan について特徴的なことは，〈true〉或は〈real〉と，〈make-believe〉の区別がないことである。このことは，彼が，他の迷い子とは異なった独自性〈they knew it was make-believe, while to him make-believe and true were exactly the same thing〉(p. 90) を持っていることの例証である。

例えば，Peter は，他の子供にとっては，遊び・ごっこ〈make-believe〉

である食事で，実際に肥ってしまう〈Make-believe was so real to him that during a meal of it you could see him getting rounder〉(p. 100) のである。これは，彼には行為が表わすことのできる意味の二重性，つまり，虚と実の区別がなく，存在は単層的であり，視点は常に単眼で，変化や繰り返しという時間性を知らないことを明らかにしている。彼には，全てのことが，初めての新しい，しかも，唯一絶体的な意味を知る体験である。それは相対化されることのない，一回性の連続である。このところに Peter の永久の幼さ，若さの示す意味のひとつが表現されていると思われるのである。

同じように，Peter の永久の若さを例証するものとして，子供の心に深い傷を負わせ，それ以前の子供ではなくしてしまう〈unfairness〉ということがある。これについては，つぎのような描写がある。

Not the pain of this but its unfairness was what dazed Peter. It made him quite helpless. He could only stare, horrified. Every child is affected thus the first time he is treated unfairly. ... but he will never afterwards be quite the same boy. No one gets over the first unfairness; no one except Peter. He often met it, but he always forgot it. I suppose that was the real difference between him and all the rest. (p. 118)

他の子供たちが，癒しがたい，痛い体験を忘れられないために，それ以後は以前の自分ではなくなることを自覚するのは，変化するという，時間の中に組み込まれた存在であることを表わしている。つまり，他の子供たちが変化，即ち，成長への可能性を秘めているのに対して，彼は，心に，常に初めての，新しい痛みや恐怖を感じ続ける存在である。ここに，Wendy や彼女の弟たち，他の迷い子たちと共に市民社会に戻って，ごく普通の人〈as ordinary as you or me〉(p. 208) に成長することを拒否した Peter の，時間からの逃亡者，はずれ者という独自の姿がある。

逃亡者，はずれ者としての Peter に具現されている，若さ，幼さが伝え

ているのは，彼が人間について多くの事柄に無知であることでもある。例えば，一つには，まだ，性的な意味において，愛することの意味を知らない，あるいは，人間的な情愛，あるいは，性というものに無知な少年であるということである。〈every inch a woman〉(p. 41) である Wendy の心の動きを理解せず，Wendy は〈his ignorance about kisses〉(p. 46) にまごついてしまうし，Peter は実際にキスされても〈Funny〉(p. 47) と答えるだけである。また，妖精 Tinker Bell の Wendy に対する嫉妬心を理解できない設定になっている。しかし，Wendy が両親の家に帰った時，怒って，彼女を嘆げかせ，苦しめ，憤らせるような行動をわざと行い (p. 158)，〈I'm fond of her too〉(p. 200) と言う，淋しさを，人恋しさを知る少年としては設定されている。

人間的な感情や気持ちが希薄な Peter ではあるが，〈the sly one〉(p. 49) 〈Peter had been luring them〉(p. 52) という表現が示すように，それなりの知恵を用いて，彼は自分の楽しみを求める少年であり，その行動は自己中心的であって，彼の最終の関心は，自分の賢さ〈it was his cleverness that interested him and not the saving of human life〉(p. 56) にある。彼は，〈I can't help crowing, Wendy, when I'm pleased with myself〉(p. 41) と影を縫い付けてくれた Wendy を忘れ，自分の知恵でそれが出来たかのようにはしゃいでいる。彼は，まるで，自分を見つめて恋こがれた Narcissus のようであり，〈How clever I am〉(p. 41) 〈oh, I am a wonder!〉(p. 112) と，ことあるごとに，自分の賢さと素晴らしさを叫ぶのである。しかし，それはまた，彼の魅力〈this conceit of Peter was one of his most fascinating qualities〉(p. 41) でもある。だから彼の自負心や，まれに見るような自惚れ〈there never was a cockier boy〉(p. 41) は，Peter を永遠の少年として在らしめている，活力に満ちた原動力でもあると考えられるのである。と同時に，次章で述べる，傲慢の故に天上界から墜落した美貌の Lucifer と同じく，このような自負心や誇りは，彼ら独自の在り方を決定し，方向を定めていく要素であって，これもまた，Greene の描出した悪を行う人物を理解する鍵の一つでもあると考えられるのである。

Ⅲ

『カトリック大辭典』によれば，悪魔は〈悪しき根源霊ではなく，むしろその傲慢のために堕落した第一位の最高なる＼天使である。彼はその墜落に當たって他の天使達を引き堕し，従って彼のためには＼地獄に於ける永遠の火が備へられてある〉[24] と説明されているように，堕天使〈a fallen angel〉は，最高の天使 (Lucifer, Satan) に引き連れられて，天界から堕落した天使のことである。

J. B. Russell は，〈堕天使は宇宙に存在する他のすべてのものと同じように善いものとして創造された。そして天使の身分にふさわしいあらゆる善い賜物を受けた〉[25] 存在であったが，〈天から地獄の口の中に落ちてゆくにつれて，天使たちは貧弱な翼と尾のついた，しぼんで小さい黒い小鬼〉[26] となったと紹介している。こうして，堕天使については，

神の光にみつる創造世界に対抗する攪乱的要素，世界破壊原理を悪魔，サタンおよびその使者デーモンたちとみる表象が発生した。神の美しい完全な創造行為における被造物に対する然りの中には，その欲したまわないものへの否も含まれている。この神的否によって否定されながら，しかもなお仮像でも幻想でもなくて現実の力として被造物を攪乱する否定的なもの，非実在・非本質・反神的・不自然の力としてリアルに働いているもの[27]

とみなされるに至ったのである。

J. B. Russell によれば，スコラ学者の Thomas Aquinas の意見では，純粋な現実存在，完全な善であり，完全な存在である神に向かって，自然的な存在は神の方へ向かい，自分自身を十分に実現するが，このデーモン，つまり悪魔の本質である悪はその自然の運動から離れること，実在から無へと方向転換することである[28] と述べている。

Russellは，さらに，Thomas Aquinasの悪についての教理の中心は欠如であり，被造物がもっていることが自然であるような善の欠乏のみが悪である[29]として，悪を四種類に区分していることを紹介している。その第四の悪は罪の悪，すなわち道徳的な善を欠くこと[30]とし，それは，知的，理性的な被造物の付属物である自由意志のなせること，つまり，道徳的悪とは，それと承知しながら悪を選ぶことなのである[31]。

実在から無へと方向転換すること，つまり，神からの分離という〈悪魔の罪の質とは，自力で幸福をつかみとろう，神のように自分の運命の支配者になろう，主に感謝の義務を負うまい，という願望にある高慢〉[32]であり，Lucifer はこの高慢を抱いている存在であり，それは〈この天使が自分が神でないこと，自分は神に依存していること，この依存の状態を受け入れるかどうかは自分の選択であること，を悟った〉[33]からであるとしている。この認識は，きわめて人間的な限界状況認識を，Lucifer に投影したものであって，〈われわれは神ではない――われわれの意志は実行されるとはかぎらない，われわれはきらわれたり無視されたりするだろう，われわれは死ぬだろう――ということをはじめて発見したときに生まれる憤激，これが最初の反抗であ〉り，〈人間だけが，自分が宇宙と一体でないことに気ずい〉たときの，〈この知に，神からのわれわれの疎隔がある〉[34]という，自分の運命について理解することのできる知性をもつ存在，という性格が，神から無へ向かう者に付与されて来るとRussellは説明している。

このようなLucifer を主とし，彼に従った〈堕落した天使は，天上の真の故郷から追放された知的存在者である。かれらは天から雨のように降ってきた，天上の歓喜から逐われて蔑まれている一党〉[35]なのである。

〈悪魔に従う天使たちは悪魔の高慢と愚行に倣うのである。堕落ののちかれらは悪魔に従うデーモンになる〉[36]とされ，この意味においてLucifer（悪魔）に付与されている性格が，同じく堕天使の特色ともなりうることが推測されるのである。それらは，〈反抗と定められた運命のもつ悲哀と狂暴性〉[37]〈最悪の，正義への違背〉〈主をもたない（hlafordless）無法者と

してのさすらい〉〈神の影〉〈抵抗，分裂，英雄的誇り〉[38]，また Dante によって描かれる〈闇と氷〉〈無一沈黙，欠乏，欠如，空虚〉〈収縮〉〈憎悪〉〈絶望〉[39]である。

こうして，人間のすべての心理や行動を悪魔に結びつけることによって，〈デーモンの人格が発達し，かれらの動機が心理的に納得のゆくものになるにつれて，デーモンはしだいに人間的になっていき〉[40]，文学における悪者，悪漢の出現となるのである。

ところで，Greene は *The Third Man* における Harry Lime に見る悪魔性〈evil〉を先述のように，Marlowe の悪魔を比喩として用いて，〈devils wore squibs attached to their tails〉と描写しているが，尾に爆竹をつけた悪魔は，*The Tragical History of Doctor Faustus* の A. H. Bullen, B. A. による版[41]では見い出せない。爆竹を付けられるのは，ぶどう酒商人と馬丁の Robin と Ralph の三人〈*Enter* Mephistophilis, *sets squibs at their backs, and then exit. They run about*〉(Scene IX) である。また，花火を用いる場面もある〈*Re-enter* Mephistophilis *with* a Devil *drest like a Woman, with fireworks*〉(Scene V)〈Faustus *and* Mephostophilis *beat the* Friars, *fling fire-works among them and exeunt*〉〈Faustus *strikes the door, and enter a devil playing on a drum*; *after him another bearing an ensign*; *and divers with weapons*; Mephostophilis *with fireworks*〉[42] が，身体に爆竹や花火を付けた悪魔は登場しない。しかしながら，1616年版では，Mephistophilis が〈Now with the flames of ever-burning fire〉[43] と云って飛び去って行くので，Mephistophilis 及び他の悪魔は花火や爆竹を常に身に付けている可能性が考えられるのである。

ともあれ，*The Tragical History of Doctor Faustus* において，堕天使の代表として活躍する Mephistophilis は，Scene Ⅲ で，Faustus との対話において，その身分と役目が明らかにされている。

かつては，天使であり〈most dearly loved of God〉(L. 67) であった Lucifer は，今は自らの〈pride and insolence〉(L. 69) の故に，〈Prince of

Devils〉(L. 68) の身になってしまった。Mephistophilis は，その Lucifer の忠実な家来〈I am a servant to great Lucifer, / And may not follow thee without his leave: / No more than he commands must we perform〉(LL. 41-43) である。彼は Lucifer と共謀して神に逆らい，永久に地獄に堕とされた不運を嘆く悪魔〈Unhappy spirits that fell with Lucifer / Conspired against our God with Lucifer / And are for ever damned with Lucifer〉(LL. 72-74) であり，そして，その住む場所は地獄〈Hell〉(L. 76) と呼ばれるところである。そこで，彼は責めさいなまれ，永久にとどめおかれる。そこには，境界はなく，定められた領域はなく，彼の居るところ即ち地獄，彼が永久に在らねばならぬところ (Scene V, LL. 117-120) なのである。だから地獄とは，まさに今，Mephistophilis 自身の居るところ〈Why this is Hell, nor am I out of it〉(L. 78)，かつては天上界の至福を味わいながら，それを永久に失ってしまった故に，一層その苦悩の深さを知る〈Think'st thou that I who saw the face of God, / And tasted the eternal joys of Heaven, / Am not tormented with ten thousand Hells, / In being deprived of everlasting bliss?〉(LL. 79-82) 場所のことなのである。

さらに，Mephistophilis は，Faustus が〈What, is great Mephistophilis so passionate / For being deprived of the joys of Heaven?〉(LL. 85-86) と驚くほど，弱く，苦悩し，おののく魂〈O Faustus! leave these frivolous demands, / Which strike a terror to my fainting soul〉(LL. 83-84) の持ち主でもある。Scene V でも，Mephistophilis は，人間を苦しめる彼にも苦痛があるのかと驚く Faustus〈Why, have you any pain that tortures others?〉(L. 43) に〈As great as have the human souls of men〉(L. 44) と，人間同様に苦悩する存在であることを伝えている。ここには，かなり人間臭の強い，人間と同じ心理を備えている悪魔が登場しているのだということが出来よう。

このような Mephistophilis の役目は，人間の魂を獲得して〈We fly in hope to get his glorious soul〉(Scene Ⅲ, L. 50)，地獄に堕ちて悲惨をともに嘆き悲しむ者を増して〈It is a comfort in wretchedness to have com-

panions in woe〉[44]，彼の主である Lucifer の王国を拡大する〈Enlarge his kingdom〉(Scene V, L. 40) ことである。こうして，堕天使 Mephistophilis は，神に反抗する地獄の王 Lucifer の家来として，Lucifer に魂を売った Faustus の，地獄への先導者となるのである。

さて以上述べてきた〈a fallen angel〉に伴う要素や特質が〈the Pinkies〉と呼ばれる登場人物の造型上の，もうひとつの要素となっていることについては，Ⅳ以下において，具体的に分析してみたいと思う。

（以下次号）

注

1. A. A. De Vitis, *Graham Greene* (Twayne Publishers • Boston, 1986) p. 67
2. B. P. Lamba, *Graham Greene: His Mind and Art* (Sterling Publishers Private Limited, 1987) p. 22
3. A. A. De Vitis, p. 68
4. *Ibid.*, p. 73
5. K. C. Joseph Kurismmootil, S. J., *Heaven And Hell On Earth* (Loyola University Press, Chicago, Illinois, 1982) p. 44
6. *Ways of Escape* (Simon and Schuster, New York, 1980) p. 79
7. Richard Johnstone, *The Will To Believe* (Oxford University Press, 1982) p. 75
8. B. P. Lamba, p. 11
9. K. C. Joseph Kurismmootil, S. J., p. 44
10. Samuel Hynes ed., *Graham Greene* (Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J., 1973) p. 175
11. Norman Thomas di Giovanni ed., *In Memory of Borges* (Constable London, 1988) p. 58
12. *Ways of Escape*, p. 75
13. *The Third Man* (William Heinemann & The Bodley Head, 1976) p. 103
14. ピーター・カヴニー『子どものイメージ』，江河　徹訳，紀伊国屋書店，1979, p. 369
15. *Ibid.*, p. 368
16. *Ibid.*, p. 369
17. *Ibid.*, p. 203
18. *Ibid.*, p. 26

19. *Ibid.*, p. 259
20. *Ibid.*
21. *Ibid.*, p. 270
22. *Ibid.*
23. J. M. Barrie, *Peter Pan* (Puffin Books, Penguin Books Ltd., 1986) p. 187 本文中のページ数はこの版による。
24. 『カトリック大辭典』Ⅲ，冨山房，昭49，p. 531
25. J. B. ラッセル『ルシファー』，野村美紀子訳，教文館，1989，p. 27
26. *Ibid.*, p. 152
27. 『キリスト教大事典』，教文館，昭43，p. 15
28. *Ibid.*, p. 221
29. *Ibid.*, p. 222
30. *Ibid.*, p. 221
31. *Ibid.*, p. 226
32. *Ibid.*, p. 228
33. *Ibid.*
34. *Ibid.*
35. *Ibid.*, pp. 271-272
36. *Ibid.*, p. 310
37. *Ibid.*, p. 154
38. *Ibid.*, p. 156
39. *Ibid.*, p. 264
40. *Ibid.* pp. 321-322
41. A. H. Bullen, B. A. ed., *The Works of Christopher Marlowe* (AMS PRESS, INC, 1970) 本論中の場及び行数は，注のない場合は，この版によるものである。
42. J. B. Steane ed., *Christopher Marlowe: The Complete Plays* (Penguin Books Ltd., 1986) Act Ⅲ, Scene Ⅲ 及び Act Ⅳ, Scene Ⅲ
43. *The Works of Christopher Marlowe, Appendix to Dr. Faustus*, Scene Ⅸ
44. *Christopher Marlowe: The Complete Plays*, Act I, Scene Ⅴ, L. 42 脚注